

Aichi University

Lingua



INSTITUTE FOR LANGUAGE EDUCATION, AICHI UNIVERSITY

No.18 December 2021

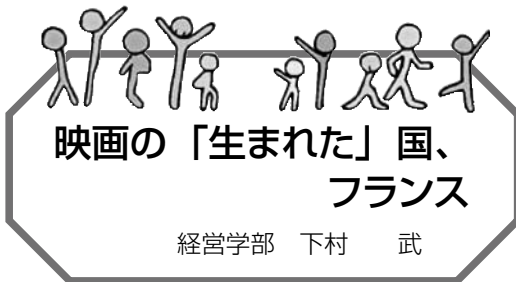


ル・マンの映画館「レ・シネアスト」の入り口。上映室は地下にあります。(フランス)

CONTENTS

<特集> 映画を通して言語、文化に触れよう

・フランス	映画の「生まれた」国、フランス	経営学部 下村 武	2～3
・ドイツ	エーリヒ・ケストナーは映画でも面白い!	文学部 河合まゆみ	3～5
・ギリシア	ギリシアの映画監督テオ・アングロプロス (1935-2012) : ヨーロッパの周辺を知るために	経営学部 島田 了	5～6
・ロシア	戦車、白鳥の湖を踊る ～ロシア映画『T-34』(2018年)～	経済学部 清水 伸子	6～9
・韓国	韓国セミナーで見た『ジャンヌダルク』	現代中国学部 藤森 猛	9～10
・日本	留学生の目に映る『千と千尋の神隠し』	国際コミュニケーション学部 高村めぐみ	11～12
・アメリカ	『アメリカン・ビューティー』と喪失感	国際コミュニケーション学部 塚本 鋭司	12～13
・アメリカ先住民	映画に描かれてきた「インディアン」	経営学部 地村みゆき	13～15
・アカデミー賞	Academy Aperture 2025 とクロエ・ジャオ監督『ノマドランド』	現代中国学部 川村 亜樹	15～16
<名古屋キャンパス>メディアゾーン紹介			17
<豊橋キャンパス>ランゲージセンター紹介			18～19
2021年度外国語検定試験奨励金のご案内・編集後記			20



みなさんがフランスで映画と聞いて思い出すのは、世界三大映画祭のひとつ、カンヌ国際映画祭かもしれない。例年は5月に行われるカンヌ映画祭は、今年2021年は7月に開催され、昨年はコロナ禍で中止になったため2年ぶりの現地開催となった。日本映画では、村上春樹の短編小説を原作にした『ドライブ・マイ・カー』が長編コンペティション部門に参加し、監督の濱口竜介と共同脚本の大江崇允が脚本賞を受賞したことで日本でも話題になった。他にも、「ある視点」部門の開幕に上映されたのは旧帝国陸軍少尉だった小野田寛郎さんを取り上げた『ONODA 一万夜を越えて』だったし、アニメ監督細田守の『竜とそばかすの姫』も公式上映された。カンヌ映画祭については Lingua の昨年の号で永田先生が書かれているので、ぜひそちらも読んでください。

ところでみなさんは映画がどこで生まれたのか知っていますか？アメリカの発明王エジソンは、1890年にキネトスコープを発明し「映画の父」としても有名です。実はフランスにも、もうひとり（兄弟なのでもう二人の）「映画の父」がいるのです。それがリュミエール兄弟です。兄のオーギュストと弟のルイのリュミエール兄弟は世界最初の実写映画を作ったと言われ、工場の終業時間に出口から出てくる労働者

たちの姿を撮影しました。そもそも映画とは、パラパラマンガのように連続する写真をコマ送りして再生することで、文字通り動く画として映像を見せる技術です。リュミエール兄弟のシネマトグラフは品質と経済性の理由から一秒間に16コマというスピードで撮影をしました。これがのちにトーキーの時代になり映像に音声がつくと、一秒間に16コマという遅いスピードでは音声をつけてうまく再生することができず、一秒間に24コマのフレームレートで撮影／上映されるようになり、これが映画の世界で現在まで続く一つの基準になっています。ちなみに現在、日本のテレビのデジタル放送では高解像度の画像を一秒間に30コマ再生しています。こうして一秒間に16コマのフレームレートを特徴とするリュミエール兄弟の発明したシネマトグラフと呼ばれる撮影機は、現在の私たちが知る映画の原点に位置しているわけです。その後の映画の発展に与えた彼らの功績は大きく、フランス中部の都市リヨン出身の彼らの生家の一画は現在、リュミエール美術館やリュミエール研究所となり、貴重なフィルムや機材、映画作品や映画関係の資料がたくさん集められています。また、リュミエール美術館の向かい側には、「最初の」映画が撮られた工場の一部を保存して映画館になっています。世界で最初の映画が撮られた場所が映画館になっているなんて、なんだか映画の「生まれた」国フランスらしいと思いませんか。この映画館「ブルミエ・フィルム」（「最初の映画作品」の意）では古今東西の名作がいつでも上映されていて、数年前にリヨンに友人を訪ねた際に私も立ち寄ったことがあります。その時には偶然日本の映画監督

小津安二郎の企画上映が行われていて、小津映画の『秋刀魚の味』をみました。

このリュミエール兄弟の映画館「プルミエ・フィルム」だけでなく、フランス各地には日本ではあまり見かけることのない少し変わった映画館があります。なかでも私の記憶に強く残っているのは、フランス西部の都市ナントにある映画館「ル・シネマトグラフ」です。ナントの旧市街にあるこの映画館の特徴はなんと言っても、元々カルメル修道会の礼拝所（チャペル）だった建物を使っている点です。歴史を紐解くと、元は17世紀に作られた礼拝所がフランス革命の時代に修道会が追放され牢獄として使われるなどした後、20世紀になって映画館として使われるようになったようです。この「ル・シネマトグラフ」も新作映画だけでなく、「プルミエ・フィルム」のように名作映画を安い料金で見られるようにしています。フランスでは日本に比べて安い料金（大体一作品600円前後）で映画を見られますが、現在は日本のように郊外型のシネコンが増えています。しかし街中には上記のようないわゆるアート系シアターもまだまだ頑張っています。私が留学していたル・マンの街には、中世の街並みがそのまま残る旧市街に貴族の古い館を使った「シネボッシュ」がありました。このシネボッシュがのちに街の中心部に「レ・シネアスト」として新しくオープンします。留学中にはこの映画館でたくさんの映画を見ました。日本映画もたまに上映されていて、是枝裕和監督の作品はどれも人気でした。

フランスで人気の日本映画は、ジブリアニメはもちろん小津や是枝のような家族をテーマにした作品です。



最後におすすめの ナントの映画館「ル・シネマトグラフ」



リュミエール兄弟の銅像

出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Yekaterinburg_Lumiere_brothers_monument.JPG

フランス映画について。フランソワ・オゾンやセドリック・クラピッシュの監督作品はどれもオススメです。他にも2006年のオムニバス映画『パリ、ジュテーム』もフランス映画の入門としてぜひ一度見てください。

エーリヒ・ケストナーは 映画でも面白い！

文学部 河合 まゆみ



ドイツ文学の映画化作品を授業で紹介することがありますが、そういう時、学生さんから文句なしに面白いと言ってもらえるのがケストナー作品の映画です。みなさんはエーリヒ・ケストナー（Erich Kästner 1899-1974）を知っていますか？世界的に有名な児童文学作家で、『エミールと探偵たち』『飛ぶ教室』『ふたりのロッテ』などの傑作があります。実際に読んだことがなくても、名前くらい聞いたことがあるのではないのでしょうか。ケストナーの作品は度々映画化されており、どの原作小説も映画もほんとうに面白くておすすめなのですが、なかでもイチオシが『エミールと探偵たち』です。

この映画を観た学生さんたちからは、最初は子供向けの映画だろうと少し高をくくっているところもあるのですが、「途中から引き込まれてしまった」「思わず見入ってしまった」という感想が返ってきます。

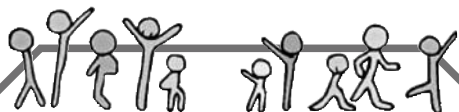
『エーミールと探偵たち』(Emil und die Detektive 1929 年)は、ケストナーの最初の児童文学作品で、世界各国語に翻訳されて人気を博し、彼の名前を一躍有名にしました。ここでケストナーの家庭環境について一言。ケストナーの両親は夫婦仲が悪く、母親は一人息子のケストナーを溺愛して育てました。(ケストナーのほんとうの父親は一家の主治医であったZ博士だという話まであります。)ケストナーも母親の期待に応えようと一生懸命で、その分父親とは疎遠になりました。こうした母親と息子の親密な関係が、作品にも織り込まれていて、とくに『エーミールと探偵たち』にはそれが顕著にみられます。では、なぜケストナーは主人公に、革職人であった自分の父親の名前エーミールを与えたのでしょうか。作中、エーミールの父親は死んだという設定になっていますが、このあたりにケストナーの父親に対する微妙な心情が垣間見えます。

さて『エーミールと探偵たち』ですが、1931年に本国ドイツで初映画化されて以来、日本を含めた世界各国で度々映画化されています。ドイツでは、1931年、1954年、2001年とこれまで3回映画化されていますが、なかでも1931年の初映画化は、のちにハリウッドで映画監督として活躍するビリー・ワイルダーが脚本を手掛けており、当時、ドイツだけでなくアメリカやイギリスでも大成功をおさめました。ケストナー自身、映画製作に積極的にかかわり、その出来栄には概ね満足だったようで、みずからカメオ出演もしています。この1931年の映画は日本でDVD化されていないため、残念ながら字幕付きで観ることはできませんが、初期トーキーのモノクロ作品で、列車の中でエー

ミールが見る悪夢、大戦前の大都市ベルリンでタクシーに乗っての追跡劇、泥棒が泊まるホテルの部屋にエーミールが忍び込むなど、後続の映画化にも引き継がれる見どころシーン満載です。

この初回の映画化作品は、多くの映画化のなかで最高の出来という評価を得ていますが、私がここでお勧めしたいのは、また学生さんたちの評価も高いのが2001年の映画化作品です。これは日本でもDVD化されているので、字幕付きで鑑賞できます。ケストナーの生誕100周年を記念したこの映画化では、女性監督フランツィスカ・ブーフがかなり大胆に原作に変更を加えています。それは一言でいえば、ジェンダーの転換です。まず主人公エーミールが母子家庭から父子家庭に置き換えられています。家庭を捨て海外へ行った母親にはすでに別の相手があり、エーミールは失業中の父親と再統一後の旧東ドイツで貧しいながらも二人心通わせて暮らしています。最初にこの映画を観て、冒頭でエーミール父子が登場した時、「ここを変えちゃいますか!？」と驚いたことを覚えています。この映画では、エーミールの波乱万丈の冒険は、すべて父親への愛情から発していますが、息子の愛情に、対象が母親か父親かの違いはなく、映画を観ていくうちに違和感は消え、どこか情けないが憎めない父親(原作の母親はひたすら強い!)を放っておけないエーミールに共感していました。二つ目の注目点は、ベルリンの子どもたちのリーダーを男の子のグスタフから女の子のポニー(原作では主人公の従妹)に変更したこと。彼女は正義感と行動力にあふれ、仲間の少年少女をみごとに差配します。また勇気と機知を兼ね備え、泥棒が宿泊するホテルの部屋のマスターキーを見事に手に入れてみせます。三つ目ですが、エーミールのベルリン行きは、クラスの担任のフンメル先生からベルリンに住む先生の妹のところしばらく滞在するようすすめられたからですが、

この妹がなんと牧師という設定です。こう書いても、みなさんにはあまりピンとこないかもしれませんが、キリスト教でもプロテスタントでは教派によっては女性も牧師になれますし、牧師は結婚も許されています。しかしカトリックではいまだに神父は男性のみであり、妻帯も許されていません。映画中で、祭服を着たフンメル牧師が車を運転中、運転に文句をつけた車にむかって中指を立てるシーンがありますが、相手の驚愕ぶりが印象的でした。父子家庭のエーミール、父母が離婚の危機にさらされているボニー、女手一つで息子グスタフを育てるフンメル牧師と、現代ドイツの家庭事情が反映されています。また映画の舞台となっている再統一後のベルリンも、多文化共生を目指す首都として描かれていて、エーミールを助けてくれる子どもたちが様々な民族の出自となっているのも映画の魅力の一つです。ぜひ一度観てください！



ギリシアの映画監督テオ・アンゲロプロス (1935-2012): ヨーロッパの周辺を知るために

経営学部 島田 了

学生の皆さんは2010年の欧州債務危機というのをご存知でしょうか。ユーロ危機ともいわれ、ギリシア政府の粉飾決算が暴露されたことからユーロ関連の経済危機が連鎖しておこった事件です。これにより、ギリシア経済の脆弱さとユーロ加盟諸国間の格差が浮き彫りになりました。

美しいエーゲ海と白亜に輝く古代神殿のポスターとともに紹介されることの多いギリシアですが、その歴史は困難の多いものでした。2世紀以降はローマの支配下に、15世紀以降はオ

スマン帝国の支配下にありました。19世紀になりオスマン帝国の弱体化と西欧列強の介入により、1900年ぶりにギリシア人の国家が復活することになりました。1832年にバイエルンの王子を国王に迎えギリシア王国が成立します。しかし政治は安定せず、後継者として新たにデンマークの王子を新国王として迎えることになります。その後もクーデターによる共和制の成立、王政の復活など不安定な状態が続きます。第二次世界大戦には連合国側として参戦するも、1941年にはドイツの侵略を受け、占領状態に置かれます。

第二次世界大戦後は連合国によって解放されますが、1946年からは王党派右派と共産主義左派との対立からギリシア内戦が勃発します。1949年に内戦は終結し、1950年には総選挙の結果、保守連立政権が発足、さらに翌年の選挙によりようやく政局は安定するかと思われました。

しかし1960年代に中道左派が躍進すると、これを警戒する軍のクーデターがおき、その後軍事独裁政権が成立して、国内で厳しい弾圧が行なわれます。1970年代に国民の不満、学生による大規模なデモなどの抗議活動が活発になります。1974年の軍事独裁政権の崩壊後初の選挙により、君主制の廃止・民主制への意向が決定され、民主主義が回復されます。それから大きな混乱もなく安定をつづけ、1981年にヨーロッパ共同体（ヨーロッパ連合の前身）に加盟を果たしたのでした。

長々と歴史の話をしましたが、こうした複雑で困難な背景をギリシアは背負っているのです。この複雑なギリシアの現代史とじかに向かい合ったのが、テオ・アンゲロプロス監督で、彼の代表作が『旅芸人の記録』（1975年）です。1936年から1975年までのギリシア現代史をあつかった、4時間弱（232分）という長い映画です。歴史を扱ったといってもただのドキュメンタリー映画ではありません。旅芸人の一座が

各地で目撃し、遭遇する事件を通して歴史が捉えられていきます。しかも旅芸人一家の父の名前はアガ멤ノン、母はクリュタイムネストラ、長女はエレクトラというように、古代ギリシアの神話を下敷きにしています。歴史上の事件とギリシア神話を思わせる一家の出来事、そして一座が演じる劇中劇とが、幾重にも重なりあって物語を紡いでいきます。また一座は、旅を繰り返すことによって時間のなかをもさまよいます。この時間と空間をめぐる旅を通して我々は過酷な運命に耐えながら、生きることをあきらめないギリシアの民衆の姿を知ることができます。

演出は全体に抑制的で、例えばカメラを固定して事件を正面から撮ることにより、演劇の舞台を思わせるような演出が多用されています。音楽も控えめで、それだけにいっそう人々の足音や雨音などが印象的に響いてきます。

その他の代表作として『シテール島への船出』(1984年)があげられます。30数年ぶりにかつての内戦の英雄が国外追放から帰ってきます。人々は戸惑いながらも彼を歓迎しますが、そこにある種の居心地の悪さも感じているようです。ある日、村の人たちが土地を売ろうとしているのを彼は知ります。その土地はかつて彼が仲間とともに命をかけて地主たちから勝ち取ったものでした。彼は静かに抗議の姿勢を見せ始めます。豊かになった人々が忘れてしまった大切なものを再度突きつけられて困惑する人々の様子が、やはり静かに淡々と描写されていきます。物語はここでも象徴的に表現され、現実の出来事と主人公の監督が撮影中の映画の場面とが重なりながら、進んでいきます。この作品の背景にも、トロイ戦争の後も長く故郷を留守にして彷徨をつづけたオデュッセウスの帰還と夫を待ち続けた妻ペネロペーの神話が重ねられてもいます。

タイトルの『シテール島への船出』から連想されるワトーの絵画のような美しい画面が印象

に残り、特に最後の「船出」の場面は忘れることのできない場面となるでしょう。彼の居場所は故郷にはもうないのです。救いのない結末のなか、信念を持つ人の美しさと、困難の中で再び見出された夫婦の愛が、夢をかなえる伝説の島「シテール島」への船出を連想させるのでしょうか。

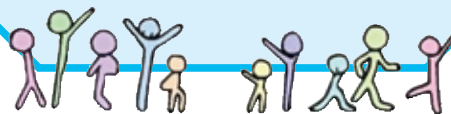
その他にヨーロッパの豊かな国への出稼ぎに頼らざるを得ないギリシアの社会を背景にした『霧の中の風景』(1988年)や移民問題を扱った『こうのとりの、たちずさんで』など、アンゲロプロス監督は数々の難問に、美しい画面で、静かにしかしきっぱりとした抗議の姿勢をもって挑んでいきます。

アンゲロプロス監督の映画を私はきちんと理解できたわけではありません。しかし彼の映画を通してヨーロッパの周辺国であるギリシアが抱える問題に触れ、その苦悩をうかがい知ることにはできました。ヨーロッパの中に多様性という言葉で簡単に済ませることのできない現実があるのです。

映画そのものの説明はうまくはできませんが、アンゲロプロス監督とその作品の紹介には少しはなったのではないのでしょうか。この名前を覚えておいて、機会があればぜひご覧ください。皆さんのヨーロッパの理解が深まるきっかけになることは保証いたします。

戦車、白鳥の湖を踊る ～ロシア映画『T-34』(2018年)～

経済学部 清水 伸子



1. 戦車は奥が深い

「戦車博物館に行きたいんですね。」

最近5年の間に、この告白を4人の学生から聞いている（実際に行った学生も1人いる）。

面白いことに、この学生たちは、みんながみんな、どこに戦車博物館があるのかを言わずに、いきなり＜戦車博物館＞で話を始めるという共通点がある。どうやら、「清水なら、＜戦車博物館＞だけで話が通じる」と思っているようで、大変不思議である。

はじめてこの告白を聞いたとき、モスクワの戦勝記念公園の博物館に戦車が1台展示されているのを思い出した。しかし、学生の話によると、モスクワ州クビンカ市の戦車博物館はそんなものではなく、何台もの戦車が展示されているのだそうだ。どこからそんなことを知るのだろうと驚く私を尻目に、学生たちは、この告白に続いて、型式を挙げながら戦車の性能について語り始めたり、独ソ戦における戦車戦について語り始めたりする。「うわー、まったく話についていけない・・・」と思いつつも、彼らの熱い話しぶりに、＜きっと戦車って奥が深いのだろう（実際にはよく知らないけど・・・）＞と何度思ったことか・・・。

その私が、戦車の奥深さを実感できたのは、『T-34 レジェンド・オブ・ウォー』（2018）というロシア映画のおかげである。この映画は、ロシアで観客動員800万人、興行収益40億のメガヒットとなった映画である。愛大のO先生が、「ロシアも、やっとエンターテインメント性の高い映画が作れるようになった！」との言葉と共に、この映画を見るように勧めてくれなかったら、私は戦車を熱く語るあの学生たちの気持ちを理解できないままであったろう。

この映画を見て、はじめて、戦車は正面を攻撃してもダメで、横っ腹を狙わないと砲弾を貫通させられない（＝敵方戦車をつぶせない）ということを知った。また、敵軍を待ち伏せする場合には、戦車を藁や小屋を使って隠すなど、その場所に合ったカモフラージュの方法を考える必要があり、また、戦場の地形や街の建物の配置から敵の走行ルートを予測し、まるで将棋盤の上に駒を配置するがごとく戦車の布陣を決

める必要があることも知った。その上、接近戦ともなると、戦車自体の性能に左右される走行速度、砲身の方向を変える時間、砲弾を発射してから次の砲弾を発射するまでの間隔、そしてあの巨体を素早く方向転換させられる戦車運転者の操作技術など、様々なことを戦車戦指揮官は考えながら判断を下していかなければならない。戦車戦は高度な頭脳戦でもあるのだ。

2. 二つの映画『T-34』

実は、『T-34』という映画は二つある。アレクセイ・シドロフ脚本・監督の2018年のロシア作品と、ソビエト連邦時代の1965年に撮影された原題《Жаворонок: ひばり（邦題『鬼戦車 T-34』）》である。

両映画とも、大祖国戦争（日本では第2次世界大戦と呼ぶ）中に、ドイツ軍捕虜収容所からロシア製戦車 T-34 に乗った4人が脱走するという話である。しかし、この両者はストーリーも結末も違う。

ロシア映画『T-34』（2018）の監督兼脚本家のアレクセイ・シドロフは、「ソ連時代の映画『T-34』（1965）から影響を受けた作品ではなく、両者は全く別の作品であり、フィクションである」と述べている。実際、戦争中に、ドイツ軍は、自軍の軍事演習のためにロシア人捕虜に戦車を操縦させた事実はあったようであるが、脱走に成功した者はいなかったようだ。

また、シドロフは、「大祖国戦争を記憶に残している人々の間で矛盾を引き起こさず、若者を魅了するような方法で戦争の歴史を伝えるという設定にした」とも述べている。エンドロールで「大祖国戦争で戦った英雄、負傷兵、戦没者、帰還兵、独ソ戦を戦った全ての戦車兵に捧げる」との言葉が映し出されるので、完全なるエンターテインメント作品として作られたわけではないようだが、この「若者を魅了する」という方針が、二つの映画を全く別の映画にしたといつてよいだろう。

3. 牧歌的な戦争映画『T-34』（1965 年）

ソ連映画『T-34』（1965 年）は、戦争映画らしく、ソビエト軍の誇りであった T-34 の力強い姿を描き出している。しかし、その一方で、戦争映画でありながら、人が死ぬ場面は直接描写されない。戦車が走行するシーンでは牧歌的な音楽が流れたりして、戦争映画でありながら、むしろユーモラスにも感じられる。

1965 年と言えば、まだ大祖国戦争が終わって 20 年ほどである。ロシア人は、ロシアの地が戦場となった二つの戦争、ナポレオン戦争と第 2 次世界大戦を大祖国戦争と呼ぶ。その 2 度目の大祖国戦争の独ソ戦で、ソ連軍は、戦車 9,200 両、迫撃砲 4 万 7,000 門を投入しており、当時の観客にとっては、家族や友人がこの戦争で帰らぬ人となった記憶が未だ生々しかった時代だったはずである。この『T-34』（1965 年）の牧歌的な雰囲気は、陰惨な戦争映画としないための演出の結果なのではないかと思う。

4. 斬新なシドロフの『T-34』（2018 年）

これに対して、シドロフの戦車 T-34 の描写は全く違う。シドロフは、映画の中で、あの巨大な戦車を、チャイコフスキーの「白鳥の湖」の音楽をバックに、踊るように動き回らせている。車列脇すれすれを走行したり、くると軽やかにターンしたりするその姿は、まさに繊細で可憐なバレリーナのようなのである。

また、この映画は、映画『マトリックス』ばりにパソコン処理をした映像と、音楽を効果的に使った演出を駆使し、手に汗握る作品に仕上げられている。最後の一騎打ちのシーンへの場面転換は、ちょっとご都合主義的のようにも思えるが、しかし、この映画をエンターテインメント系軍事アクション映画として成功に導いた最大の要因は、映画の主題を国家間の対立とせず、むしろ戦車戦指揮官同士であるロシア人将校とドイツ人将校の個人対決に焦点を絞った点にあると考える。これらの特徴が、今までのソ

ビエト・ロシア映画にない斬新さを感じさせるのだ。

5. しのはれど、色に出にけり

それでもやはり、『T-34』（2018 年）を見た私の第一印象は、＜やはりこの映画はロシア的だ＞ということである。

その理由はいくつかあるが、その一つが、この映画にユロージヴィ（ロシア語では《юродивый：瘋癲行者》）の人物を登場させていることである。逃走する 4 人の戦車乗組員の 1 人である彼は、途中、街で食べ物を奪おうと提案した仲間に、「奪うのはダメだよ。お願いしなきゃ」と言っている。彼は、シリアスなストーリーの中で笑いを添えるために配置された脱力系キャラではない。ロシアでは、瘋癲行者は、キリストの受難を自発的に追体験するために愚者を装う聖愚者として愛されており、ドストエフスキーの『白痴』の主人公であるマイシュキン侯爵や、絵画「モロゾフ夫人」（スーリコフ画 1884 - 87）の右端で雪の上で座り込む男など、ロシア人にとって非常に馴染みのある存在なのである。

そして、私が一番ロシア的だと思うのは、この映画が、正義が勝ち悪が敗れるという単純なスーパーマン的ストーリーにはなっていないという点にある。

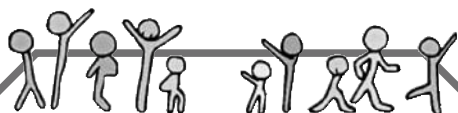
ロシア映画では、アメリカのエンターテインメ



T-34

出典： https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Zagan_czolg_T34_85.jpg

ント系アクション映画でよくみられるように、敵を倒した主人公が最後に晴れ晴れとした表情を見せることはない。そして、これと同時に、敵役登場人物も憎い敵役のままで終わるのではなく、主人公と敵の心が通じ合ったと感じさせるシーンが映画に挿入されるように思う。例えば、映画『コーカサスの虜』（セルゲイ・ボドロフ監督 1997 年）は、自分を軟禁していたチェチェン人の村を爆撃するために飛んでいく戦闘機に向かって主人公が「ダメだ。やめてくれ。戻れ！」と叫びながら走り出すシーンで終わる。そして、この『T-34』（2018 年）でも、映画最後で、あえて主人公を道連れにすることを選ばなかった敵将校の姿が描かれていると私は思う。不覚にも、このシーンにぐっと来てしまった。やっぱり、ロシア映画は一味違う。ぜひ映画を見て欲しい。（完）



韓国セミナーで見た 『ジャンヌダルク』

現代中国学部 藤森 猛

韓国セミナー

今から 21 年前の 2000 年 1 月～2 月にかけて、愛知大学の韓国短期セミナーが提携大学の中央大学で実施され（第 3 回）、私は引率として参加しました。記録を見ると学生さんたちは 1 月 31 日から 2 月 18 日までソウルの中央大学で語学研修を受け、語学研修の最終日は、中央大学の修了式や女子寮や下宿へのあいさつ、荷物整理などがあり、1 日の休養をはさんで、釜山・慶州への研修旅行に向かいました。修了式の当日、私は学生さんたちと語学研修の 9 階教室までゼーゼー言いながら階段を上りましたが、学生さんたちが 9 階までノンストップで駆け上がる姿を見て、愛大の学生さんたちが真冬のソウ



中央大学のキャンパスで（修了式の後）

ルで健康でいられた秘訣はこれだと確信しました。当時の中央大学などの韓国の大学では学生さんの教室のある建物にはエレベーターがついてないことが多く、愛大生は、朝晩・お昼・休憩の時間ごとに 1 階から 9 階をダッシュで駆け上がっていたのです。修了式の後には、学生さんたちは、下宿の管理人の方へあいさつをしました。韓国では今でも賄い付きの下宿に住んで通学する大学生が多いのですが、愛大の男子学生 14 名も下宿生活にすっかり慣れ、下宿のおばさん「아주머니」（アジュモニ、アジュマ）の朝晩の手料理がおいしかったと言っていたことを覚えています。

ソウルの映画館

韓国の中央大学は中心街の江南（カンナム）や明洞（ミョンドン）にわりと近く、学生さんたちは数人でタクシーや地下鉄を使って、買い物などをしていました。私は修了式のあとの休養日に学生さんたちと繁華街に行き、映画を見ました。映画館ではチケットを買う人の列がすごかったのですが、なんとか当日券を買い求め映画館に入りました。私は韓国映画の上映だと思ってチケットを購入したのですが、映画が開始されると、なんとリュックベンソン監督のアメリカ映画『ジャンヌダルク』でした。わたしはチケット売り場書いてあった「잔다르크」（ジャンヌダルク）というハングルが理解できないままチケットを買ってしまったのです。このことで引率の私は中国語の教員で、韓国語は全く当てにならないという噂が学生さんたちの



『ジャンヌダルク』の看板(ソウル市プサン劇場)

間で一挙に広がり、研修旅行の時には学生さんはわからない韓国語があると私に聞かずに、バスガイドの人に聞いていました。アメリカ映画『ジャンヌダルク』では神がかったジャンヌダルクがイギリス軍を次から次へと打ち破るシーンと最後に処刑されるシーンが対照的に描かれ、韓国語がはっきりわからなくてもある程度理解できる映画でした。私自身、韓国で見た最初の外国映画は『ジャンヌダルク』となり、日本でロードショー公開される前に、話題のアメリカ映画を韓国で見たという感激をもちました。

韓国での外国映画の開放

韓国では1987年に「六・二九民主化宣言」があり、韓国の映画産業では、アメリカ映画の輸入が拡大していました。また1992年に中韓関係樹立が成立し、中国の民族映画が輸入されるようになると、欧米以外のアジア映画が評価されるのを契機に、93年に韓国の民族映画『西便制』(風の丘を越えて、ソピョンジェ)が大ヒットをしました。さらに98年には金大中大統領が日本の国会で「日本の大衆文化の解禁」を表明して、韓国では北野武監督の『HANA-BI』に始まる日本映画の輸入公開が本格化して、日本のポップス、アニメ、テレビドラマなどのジャンルに拡大していきました。韓国では、かつてアメリカ、中国、日本文化の映像・音響製品や書籍類が闇市場で海賊版として販売されていたものが、みな正式な製品として、文



『ジャンヌダルク』の看板(ソウル市明洞)

化市場の店先に出回っていました。2000年の愛知大学の韓国セミナーを実施した時、韓国の映画館では韓国映画に加え、アメリカ映画、中国映画、台湾・香港映画、日本映画が上映されていたので、学生さんたちはみな驚いていました。特にこの時は日本映画がブームになっていたため、韓国の多くの人々が日本文化や日本の人に対して好感をもち、それが2002年のワールドカップ共同開催や日本や中国での韓流ブームにつながりました。

2000年の韓国セミナーでは、愛知大学の学生さんたちが、お世話になった下宿の管理人の方に真っ赤なバラの花束をプレゼントして、その花束を管理人の方は満面の笑顔で受け取られました。私にとっては映画『ジャンヌダルク』でジャンヌが手にしたバラの花として忘れられない思い出となりました。



男子下宿の前で(中央大学の近く)

留学生の目に映る 『千と千尋の神隠し』

国際コミュニケーション学部

高村 めぐみ



私は、これまで外国人留学生に日本語を教える仕事をしてきました。日本語教師は、日本語を教えるのみならず、日本文化も教えることが大切だと思っています。それは言語と文化は切っても切り離せない関係だと思うからです。

日本文化を教える方法はたくさんありますが、せっかく勉強をするのなら留学生が楽しいと思ってもらえるような方法が良いと思い、日本映画を紹介して、その内容や感想と一緒に話をしたりすることがあります。日本映画の中には、海外でも有名なものがあります。クロサワ、キタノは、特にヨーロッパでは有名なようですが、全世界で愛されているのは、なんといってもジブリ映画でしょう。

私もジブリ映画を見ますが、ジブリが大好きな学生は、私なんかよりもよほど詳しくて、多くの作品を何度も見えています。よく名前が挙がるのは、『となりのトトロ』、『もののけ姫』、『ハウルの動く城』、『崖の上のポニョ』などですが、知名度も人気も一番高いのは、『千と千尋の神隠し』だと思います。

『千と千尋の神隠し』は2002年の作品で、まだ生まれていない人もいるかもしれませんが、見たことがある人もいないのではないのでしょうか。あらすじは、両親と一緒に、10歳の少女・千尋は新しい引っ越し先に向かうが、その途中で奇妙な街に迷い込む。そこは、人間が行ってはいけない世界であったが、両親はそのルールに従わなかったため、豚にされてしまう。一人ぼっちになった千尋は、奇妙な世界の住人に助けをもらいながら、両親を人間にする方法を探る・・・というものです。

私が、留学生と「千と千尋」の話をしている

ときに、「この作品は日本っぽいな」「日本文化を学ぶのに良いな」「日本のことを深く議論できる映画だな」と思う点がいくつかあります。今日は、私の感想と共に、それを書いてみたいと思います。

1. 銭湯、風呂文化

まずは、日本文化代表格の銭湯、風呂屋から。当たり前ですが、一言で「外国人」と言っても出身はさまざまですし、また、日本人の中にも、銭湯や温泉は好きではないという人もいます。それと同じように、銭湯や温泉が好きな留学生もいれば、絶対に入りたくないという留学生もいます。しかし、私の感触では、比較的、銭湯・温泉好きの留学生の方が多いように思えます。銭湯・温泉はちょっと…派が「他人と同じお湯に浸かるなんて信じられない。汚い!」という人、銭湯・温泉大好き派の人が「お湯に浸かる前に、きちんと髪も体も洗うし、タオルは湯船に付けないから、全然汚いことなんかない。プールよりもよっぽどきれいなんだ!」とルールやマナーを語りながら、風呂文化の擁護をしてくれます。そこから、日本ではどうして公共浴場が発展したのだろうか、いつごろからあるのだろうか、なぜ日本人は温泉が好きなのか、という話になったりします。

2. 八百万の神

一神教の世界から来た留学生にとっては、日本には驚くほどたくさん神がいることに驚くようです。しかし、たいていは一人くらい日本の宗教やアニミズムに詳しい学生がいて、神道のこと、仏教のこと、いろいろと説明をしてくれます。留学生の話を聞いていると、つくづく日本は、「まったくの無宗教の国」というわけではないのだなと思います。

3. 「川」の存在

あの世とこの世を分けるのに「川」が出てくるのは、日本だけでなく、他の国にもあるようです。しかし、国や地域によって微妙に違って

いて、その話を聞くのが面白いです（確か、大男が川に架かっている橋を揺らす、という国がありました）。

4. 千尋が両親とともに興味本位で入った街

千尋のお父さんが説明していますが、作品のはじめの方で、バブル時代に作られたテーマパークが朽ち果てている場面が現れます。この場面から日本のバブル経済のことを説明してくれる学生がいて、「経済のことまで学べるなんて、とてもお得な映画だな。」と思います。

他にも畳の部屋や、千や風呂屋の従業員が着ている服、建物の様子、街並みなど、日本の文化や風景を知るのに、多くの情報が詰まっていると思います。

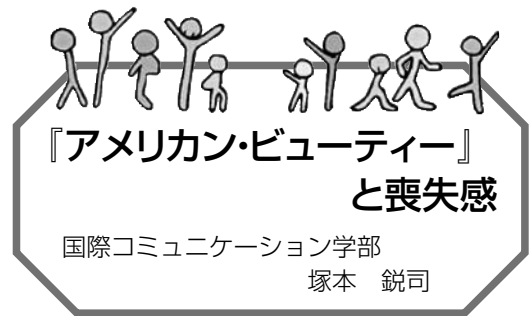
以上が、留学生が日本文化を学び、考えるのに良い映画だなと思う理由でした。

最後に、私が留学生に聞かれて、答えに詰まった質問をいくつか挙げておきます。みなさんが留学生に聞かれたら、何と答えますか？ 調べると答えがわかるものもあるので、興味がある方は調べてみてくださいね。

Q: 千尋は10歳とのことだが、少し子供っぽすぎやしないか？ / 千は10歳とのことだが、とても勇敢だと思う。自分の国の10歳の子供は一人では何もできないが、日本人の子供はみんな、あれほどまでに勇敢なのか？

Q: 鳥居の赤には魔除けの意味があると聞いたが、冒頭の引っ越し先に向かうシーンに出てきた鳥居は、なぜ赤に塗られていないのか？

Q: 食べ物屋でお父さんが一番初めに貪り食っていた食べ物は何か？ おいしそうだから食べてみたい。



『アメリカン・ビューティー』は、それまでイギリスやアメリカで舞台の演出を手がけていたサム・メンデスが、1999年に初めて監督した映画作品である。この作品はアメリカの中流階級の白人家族のあり方や彼らの価値観をうまく描写している。1990年代中頃までは、アメリカの白人は肌の色を持たない、人間の原型のような存在として扱われた。しかしながら、1990年代中頃以降から、白人であることはアメリカ社会において重要な意味を持つとの考え方が広まった。そんな文化的環境の変化が起こっている時期に制作されたのが、『アメリカン・ビューティー』である。

都市の郊外に住むレスター・バーナムは、四十二歳で広告会社に勤めていて、中流階級に属している。彼の妻であるキャロリンは不動産業をしており、家を売のに必死だ。彼ら夫婦にはジェーンという高校生の娘がいるが、彼女は両親に対して距離を置いている。ジェーンは、父と母が仲が悪いのにもかかわらず、娘に対して良き両親を演じているのが鼻持ちならない。ある日、ジェーンの通う高校で、バスケットボールの試合が行われ、ジェーンはその試合のハーフ・タイムにチア・リーダーとして踊ることになっている。母であるキャロリンは、夫のレスターを誘い、高校に行く。ハーフ・タイム・ショーが始まる直前に、彼らは高校の体育館に着く。幸い、ジェーンがコートで踊っているところを観ることができたが、レスターはジェーンと一緒にコートで踊っているアンジェラに魅了されてしまう。彼はアンジェラが胸元からバラの花びらを跳び散らかすかのような妄想を抱く。レスターは心の空虚さを埋めるために、若

い女性に対して妄想を膨らませる。

バスケットボールの試合のあと、レスターとキャロリンは、娘のジェーンに体育館の出口で会うが、レスターはジェーンと一緒に出てきたアンジェラに高揚した声で早口に話しかける。「家まで送ってあげようか」とレスターが言うのと、「車があるから大丈夫」とアンジェラが答える。そして彼は、「娘のジェーンの友達は、私の友達だ」と宣言する。両親が去ったあと、ジェーンは「もうこれ以上の惨めさはありません」とレスターについて愚痴を言うと、アンジェラは「お父さんは感じのいい人」と切り返す。娘にとってレスターという父は、理解不能な変態のおじさんでしかないが、アンジェラにとって彼は、自分の前では胸をドキドキさせて恥ずかしそうに話す少年とうつるようだ。

その後、アンジェラがジェーンの部屋に泊まりに来たとき、レスターはジェーンの部屋の扉に耳をあて、アンジェラとジェーンの会話を盗み聞きする。そのとき、アンジェラは「もしあなたのお父さんが胸と腕を鍛え上げたなら、男女の関係になってもいい」と打ち明ける。ジェーンは「気持ち悪い」とその考えを拒絶する。レスターはアンジェラの一言で、俄然若さを取り戻そうと、家の周りをジョギングしたり、家の車庫でバーベルを使って筋力トレーニングを始める。

四十二歳のレスターが、高校生の娘の友人に恋愛感情を抱き、妄想を膨らませて、若さを取り戻そうとするのは、心の中にある空虚を埋めるためだ。若さへの渴望は四十代であっても衰えることはない、とレスターは信じる。何歳になっても、若さを追求し体現しようとするのがよいという価値観が、中流階級の白人の中にあると思う。

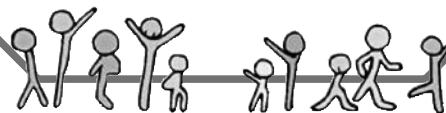
視点を妻のキャロリンに移そう。彼女は仕事において上昇志向が強い。しかし、彼女は不動産の物件を売ることには四苦八苦している。そんなとき、彼女は仕事関係のパーティーで、同じ不動産業を営むバディー・ケインと出逢う。彼は優秀な事業家で、キャロリンが望むものをす

でに手に入れている。キャロリンにとっては憧れの存在であり、広告会社を首になった夫のレスターとは大違いである。バディーはある日、キャロリンと密会をして、妻と別居したと報告する。キャロリンもこのときすでにレスターとの夫婦の絆は切れていて、これで二人の間の壁はなくなり、男女関係に発展する。

レスターとキャロリンの夫婦のあり方は、アメリカの中流階級の白人では珍しくない。キャロリンを演じたアーネット・ベニングは、インタビューの中で、「自分が演じた役は親しみがあり、映画の中だけではなく、日常生活でもよくあることだ」と言っている。夫婦関係が崩壊していて、それぞれが気になる、もしくは親密な異性がいるのが普通の状態というわけだ。もちろん、そのような崩れかけた夫婦関係において、それぞれ自分たちの関係性に意味があるかどうか、疑問を持つに違いない。また娘のジェーンはこの崩壊しかけた家族の中では孤立していて、安心できる場所がない。そのような言葉にならない疑問や不安を俳優たちが演技を通して上手に表現しているのが、この映画の面白いところだと思う。

映画に描かれてきた 「インディアン」

経営学部 地村 みゆき



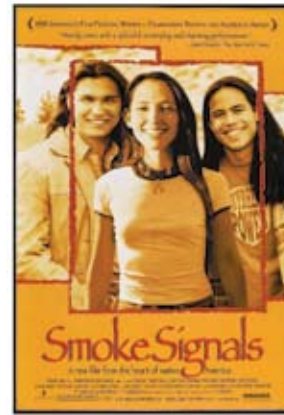
「アメリカ・インディアン」あるいは「アメリカ先住民」と聞いたら、あなたはまず何を想像するだろうか？ 名古屋に沢山の店舗を構えるインディアンズステーキハウス？ 店舗入り口には、長髪に羽飾りをつけて上半身裸の男性の人形がお目見えする。アメリカ先住民の研究をしている身としては、このステーキハウスの「インディアン」という表象の使い方に色々と文句を申したいところではあるが、これは他のコラムでの議論に取っておくことにしたい。^{*1}



インディアンズステーキハウス東片端店

こうした、日本でもよく見られる「インディアン」のステレオタイプを形成・流布してきた最大の犯人はハリウッド映画である。ハリウッドの西部劇は長らく、羽飾りをつけ上半身裸で馬に乗り、雄叫びをあげながら白人の住居を襲撃する「野蛮な」先住民を描いてきた。彼らは、「明白なる天命」のもと、ジョン・ウェイン等が演じる白人のヒーローにいずれ駆逐される運命にあった。その中で重宝されたのは、ディズニーの『ポカホンタス (Pocahontas)』のような、植民者の持ち込んだ「文明」に興味を持ち、白人の入植や開拓の手助けをするインディアン・プリンセスであり、『ローンレンジャー (The Lone Ranger)』で白人のヒーローと肩を並べ、バットマンにとってのロビンのように活躍するトントである。映画は、多様な文化的・歴史的背景を持つアメリカ先住民諸部族があたかも皆、一様に「羽飾りをつけティピー^{*2}に住み、上半身裸で馬に乗り、雄叫びをあげながらバッファローを狩り」、時に「母なる大地と会話するスピリチュアルな人々」であり、白人文明を前にいずれ「消えゆく人々」であるかのように、私たちの頭の中にそのイメージを植え付けてしまったのである。

これらのステレオタイプに対して、アメリカ先住民自身はどう考えていたのだろうか。それを私達に教えてくれる映画の一つが、1998年に公開された『スモーク・シグナルズ (Smoke Signals)』だ。この映画は、スポケーン・コー

Smoke Signals の映画ポスター^{*3}

ダレン族出身の人気作家シャーマン・アレクシーが脚本を手掛け、シャイアン・アラパホ族出身のクリス・エア監督のもと、先住民俳優たちが結集して作った映画である。先住民が作る先住民についての映画として初の試みだったこともあり、脚光を浴びた。さらに、2018年には「文化的、歴史的、または審美的に重要」であるとして、アメリカ国立フィルム登録簿に保存された。

この映画の面白いところは、先住民の若者たちが、映画が流布してきた「インディアン」ステレオタイプを笑い飛ばしているところだ。彼らは、ハリウッドが長らく投影してきた「上半身裸で羽飾りをつけ馬に乗り」先住民ではない。アメリカに住む他の若者と同じようにシャツにジーンズを身につける若者たちだ。映画には、先住民の登場人物が、テレビの西部劇で追われる先住民を見て発言するシーンがある。そして「テレビに映るインディアンも哀れだが、

Smoke Signalsの主人公ビクター(左)とトーマス(右)^{*4}

もっと哀れなのは、そのインディアンを見ている我々だよな (The only thing more pathetic than Indians on TV is Indians watching Indians on TV.)」とクスクス笑う。そこには、今を生きる先住民の若者が「消えゆく運命にあるインディアン」をテレビで見、それを日常的に消費しているという皮肉がある。『スモーク・シグナルズ』は、アメリカの植民地主義的な歴史の中で翻弄されてきた先住民が、貧困や過去のトラウマに悩み、もがきながらも、強かに今を生きる姿を巧みに描き、大衆が抱くステレオタイプを書き換えようと働きかけるのだ。

このように、映画は先住民のステレオタイプの形成・流布の装置でありながら、先住民にそのステレオタイプに反論し、書き換える機会を提供する場にもなった。アカデミー賞における多様性の問題が叫ばれて久しい。現在では、映画に限らずとも様々な映像媒体を通し、マイノリティが自分たちを語り始めている。^{*5} 今後も引き続き、そこで投げかけられる多様性に注目していきたい。

*1 私はインディアンズステーキハウスには行ったことはないが、ステーキはリーズナブルかつ美味しいそうだ。

*2 ティピーとは、主にアメリカの平原部の先住民諸部族が利用する円錐型の移動式住居のことである。

*3 Smoke Signals Movie poster (USA), Photo 12 / Alamy Stock Photo (Image ID: R2H7T3)

*4 Smoke Signals, Photo 12 / Alamy Stock Photo (Image ID: B7WPDW)

*5 今、私が最も注目している作品は、2021年7月にアメリカのHuluで始まったFXオリジナルドラマ『リザベーション・ドッグス (Reservation Dogs)』である。オクラホマ州東部の田舎町に住み、カリフォルニア行きを夢見る先住民の若者たちの姿をコメディタッチで描くこの作品は『スモーク・シグナルズ』と同様、様々な「インディアン」ステレオタイプを笑いに変え、聴衆の固定観念に挑戦している。日本で公開されたらぜひ見てほしい。



中国出身の女性映画監督クロエ・ジャオが、アジア系としては、韓国のポン・ジュノ監督『パラサイト 半地下の家族』に続き、『ノマドランド』で第93回米アカデミー賞作品賞受賞の快挙を成し遂げた。そして、女性としては、ジェームズ・キャメロン監督『アバター』をおさえて栄誉に輝いた『ハート・ロッカー』のキャスリン・ビグローに次いで、史上2人目となった。逆にいえば、90年以上に渡るアカデミー賞の歴史のなかで、作品賞を受賞した女性監督はたった2人しかおらず、多様性、包括性の観点からいえば、アメリカの映画制作において、いかに女性が、非白人女性はさらに、マイナーな存在であるかを社会に直視させる出来事でもあった。

2010年代を振り返れば、アカデミー賞における多様性の欠如を非難した #OscarsSoWhite 騒動、また、絶大な権力を掌握していた有名プロデューサー、ハーヴェイ・ワインスタインによるセクハラに対する裁判と #MeToo 運動などがあり、そうしたなかアカデミーの改革はまったなしの状況でおこなわれつつある。そこで、2020年に新たな段階の改革内容として発表された Academy Aperture 2025 の作品賞に関わる部分を参照し、『ノマドランド』の受賞理由、さらには、2021年11月公開予定のジャオ監督によるマーベル映画『エターナルズ』に対する改革の影響について検討したい。

アカデミー特別名誉賞を授与された黒人監督スパイク・リーが、白人ばかりがノミネートされているとして、授賞式をボイコットすると表明した2016年、映画芸術科学アカデミーは、2020年までに、女性と、取り上げられること

の少ない民族／人種コミュニティの数を2倍にし、国際会員を大幅に増やす、包括的なコミュニティへ向けた具体的な目標を設定した。^{*1}その結果、2015年と2020年の比較で、女性の会員数は2倍、^{*2}また、2020年にオスカーにノミネートされた女性の割合は31%と過去最高の値となった。だが、ノミネートされた有色人種は8%に下がり、変革の手を緩めるわけにはいかない状況で、^{*3} Academy Aperture 2025 が発表され、作品賞に関しては、2022年から「アカデミー包括基準様式」の提出が求められ、2024年からは、女性、特定の民族／人種、LGBTQ+の人々を具体的な人数、割合を採用するよう規定した以下の基準項目4つのうち2つを満たさなければならなくなった。

Standard A: On-Screen Representation, Themes and Narratives

Standard B: Creative Leadership and Project Team

Standard C: Industry Access and Opportunities

Standard D: Audience Development ^{*4}

『ニューヨーク・タイムズ』に長年寄稿してきたジャーナリスト、ジェシカ・ブルーダーによる同名ノンフィクションをもとにして、主演女優フランシス・マクドーマントはプロデューサーでもあり、もう一人のプロデューサー、ピーター・スピアーズはゲイで、監督はクロエ・ジャオと、製作において（非白人の）女性やLGBTQ+が大きな役割を果たすとともに、女性に焦点を当てたドキュメンタリー風作品であること自体が、Academy Aperture 2025を推進するうえで、作品賞の選考上、無視できなかったであろうと推察したくなる。しかし、「エレガントに」現代アメリカが抱える矛盾を捉えた、というレビューがあるように、^{*5}主人公ファーンが川で水に浸るシーンなど、幻想的、詩的シーンが散りばめられ、政治的配慮がなくとも高評価に値するアート性がある。しかも、家族制度を問い直して、他の移動労働者とともに集合的な主体が形成されつつ、石の売買や、石が作り出す景観が反復的に取り上げられることで、先

進的な資本主義システムへの抵抗、あるいは、皮肉とともに、ヒトの歴史的時間を圧倒する強度を持って、悠久の自然の時間から連想される、終末的恐怖ではない、ポストヒューマンな癒しのヴィジョンが展開されており、こうした新たな文化表象の可能性を具現化したことが受賞の大きな理由の一つであったと考察できる。

そして、もう一つ興味深いのが、ファーンがエンタランスで佇む映画館で上演されているのが『アベンジャーズ』という、セットにおける遊びである。これは消費主義や新自由主義を助長するハリウッドのエンターテインメント作品に対する批判では決してない。なぜなら、ジャオはマンガ好きで、^{*6} マーベル最新作『エターナルズ』を製作してきた。予告編冒頭では、カメラは海面を飛びながら浜辺、その先の山並みを捉え、その後、宗教的、原始的な空間を浮遊する飛行物体が現れ、中国系イギリス人女優、ジェンマ・チャンのアップとなる。また、マーベル初の聴覚障がい者やゲイのスーパーヒーローが登場し、『ノマドランド』とはジャンルやテーマは異なるが、ジャオの作家性を際立たせるかたちで、人新世を圧倒する強度を持って、少数者たちが連帯してポストヒューマンな集合的主体を形成することが期待される。これは、ヒトと軍事テクノロジーのハイブリッド体たるアイアンマンが背負わされた新自由主義に対する、マーベル・シネマティック・ユニバース内部からの自立的修正となるかもしれない。

*1 <https://www.oscars.org/about/academy-aperture-2025>

*2 https://www.oscars.org/newmembers2020/pdf/2020_new_members_overview.pdf

*3 <https://www.thewrap.com/oscars-2020-women-record-31-percent-nominations/>

*4 <https://www.oscars.org/news/academy-establishes-representation-and-inclusion-standards-oscar-eligibility>

*5 <https://www.hollywoodreporter.com/movies/movie-reviews/nomadland-oscar-win-commentary-american-life-4172565/>

*6 <https://www.vulture.com/article/chloe-zhao-nomadland.html>

A.U.Lingua のバックナンバーは WEB でも読めます！

過去の特集一覧はこちら↓

No.10 映画

No.11 社会科学を原語で読む

No.12 古典を撫でる

No.13「食」―世界の食卓をのぞいてみよう

No.14 グローバルラウンジ&ランゲージカフェ

No.15 オススメ海外文化情報〜アジア〜

No.16 祭事・年中行事

No.17 一度は行ってほしい・体験してほしい世界の〇〇



映画特集は
2017 年発行の
No.10 でも取り扱って
います。今回の号と
併せて、ぜひ読んで
みてください！



＜名古屋キャンパス＞メディアゾーン紹介

名古屋キャンパスでは、映像・音声資料は**厚生棟 4階メディアゾーン**にあります。

映像資料 視聴ブース	階段	W404 教室	語学 教育 研究室	情報システム課	
	EL				
メディアゾーン	受付				
キャリア支援センター		W C	W403 教室	W402 教室	W401 教室

映画やドラマの DVD の他、NHK 語学講座のテキスト&CD も用意しています！

貸出できないものは、メディアゾーン内の視聴ブースで利用してください。

【開室時間】《講義期間の月～金》 8:50 ～ 21:00

《土曜・講義期間外の月～金》 8:50 ～ 17:00

＜豊橋キャンパス＞ランゲージセンター紹介

ランゲージセンター豊橋を体験しよう！

豊橋キャンパス（3号館 1F）

開室日 月～金（祝日授業日は開室）

土・日・祝日・大学休業日 閉室

開室時間 講義・補講定期試験期間 9:10～19:00

8月・2月・3月 9:10～17:00



豊橋校舎 見取り図

① ランゲージセンター

外国語に関する本や雑誌、検定試験の対策本、さまざまな言語のDVDなどがたくさんあります。本や雑誌は2冊、2週間借りることができます。DVDはLLメディアルームで視聴することができます。どちらも学生証があれば手続きできます。冬休み、春休みに検定試験勉強をする学生のみなさんにはおすすめです。



ランゲージセンター平面図



ランゲージセンター

お得な情報

- ・春学期には過去の NHK 語学講座テキストを希望の学生に無料配布しています。希望者が多い場合は抽選になります。
 - ・今年度受けた外国語検定試験の結果に対して図書カードをもらえる外国語検定試験奨励金制度の申込が始まっています。
- 詳細は本誌の巻末に掲載していますので、検定を受けた学生はチェックしてください。

② Language Café

ランゲージセンターでは、お昼休みにネイティブスピーカーの先生と日本人の学生が集まって、英語やフランス語などでおしゃべりをします。留学生と日本人学生と一緒に日本語で話をするグローバルカフェも行っています。

今学期は English Café のみを月・水・木・金にオンライン (Zoom) で開催しています。参加する場合は、tgoken@ml.aichi-u.ac.jp まで参加希望日をメールしてください。詳細は語学教育研究室のホームページで案内しています。



2019 English Café

③ LL メディアルーム

ランゲージセンターにあるたくさんのDVD等をひとりで視聴できる部屋です。個別のブースと自習用のパソコンを3台用意しています。

e-ラーニングやレポートの作成などにも利用できます。現在は感染対策のため、1つおきに視聴ブースを使用しています。また個人のイヤホンやヘッドホンを持ってくると、より安心して使用できます。



LL メディアルーム 個別ブース

④ シアタールーム

DVDの映像を映画館のように大画面で視聴できる部屋です。現在は大人数での視聴はできませんが、利用できるようになりましたら、Live Campus 等でお知らせしますので、ぜひ一度体験してください。

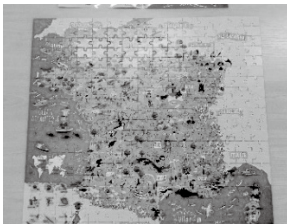


シアタールーム

みつけてみよう！

ランゲージセンターには本やDVD以外にもこんなものがあります。もちろん外国の言語や文化に関係のあるものです。探しにきてください。

A.



フランスの絵地図のジグソーパズルです。300ピースで難しいです。名産品や観光地などがかわいいイラストで描かれています。じっくり見ていると、フランスへ行きたくなります。

B.



「はらぺこあおむし」と「ぐりとぐら」の絵本です。日本でも人気のある絵本で、覚えがある人もいると思いますが、これは中国語版なのです。人気の絵本は世界中の言語に翻訳されています。言語が違って子どもが楽しい絵本は共通なのだと実感して嬉しくなりますね。

C.



ロシアのマトリョーシカです。一つ一つ手作りされていて、精巧な入れ子細工になっています。絵付けも非常に細かく、色彩も鮮やかで、見ても触っても楽しめます。

2021年度 外国語検定試験奨励金のご案内

言語	名古屋校舎		豊橋校舎	
	試験名称	基準	試験名称	基準
英語	実用英語技能検定（英検）	準1級以上	実用英語技能検定（英検）	2級以上
	TOEIC Listening & Reading Test ☆	650点以上	TOEIC	530点以上
	TOEIC Speaking & Writing Tests ☆	130点以上	TOEIC IP	①750点以上 ②前年比100点以上
	TOEFL iBT	50点以上	TOEFL iBT	50点以上
	IELTS	4以上		
	国際連合公用語英語検定（国連英検）	B級以上		
	ビジネス通訳検定（TOBIS）	3級以上		
	日商ビジネス英語検定	3級以上		
	通訳案内士（通訳ガイド）	合格		
ドイツ語	ドイツ語技能検定（独検）	4級以上	ドイツ語技能検定（独検）	4級以上
フランス語	実用フランス語技能検定（仏検）	4級以上	実用フランス語技能検定（仏検）	4級以上
	DELTA・DALF	A1以上	DELTA・DALF	A1以上
	TCF	100点以上	TCF	100点以上
中国語 ☆	中国語検定	4級以上	中国語検定	4級以上
	HSK	3級以上	HSK	3級以上
ロシア語	ロシア語能力検定	4級以上	ロシア語能力検定	4級以上
韓国・朝鮮語	ハングル能力検定	4級以上	ハングル能力検定	4級以上
	韓国語能力（TOPIK）	2級以上	韓国語能力（TOPIK）	2級以上
タイ語	実用タイ語検定	4級以上		
日本語	日本語能力（JLPT）	N1級	日本語能力（JLPT）	N1級
	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上

☆名古屋校舎のTOEICは公開テストのみとなります。☆中国語は現代中国学部を除きます。

受付期間 名古屋校舎 2022年1月31日まで

豊橋校舎 2021年12月1日～2022年2月18日まで

詳細は所属校舎の語学教育研究室にて確認してください。

奨励対象者 学部学生・短大生（協定留学生・大学院生・科目等履修生は除きます）



〈編集後記〉

映画評論家であり『日曜洋画劇場』の解説を長らく務められた淀川長治さんは「映画とは人間を知ることね。これほど人間について教えてくれるものはないのね」と言葉を残しています。今号は「映画を通して言語、文化に触れよう」というテーマで、先生方に映画に関する様々な話題をご提供いただきました。映画発祥の地フランスにある少し変わった映画館、留学生視点で見る『千と千尋』、アカデミー賞の多様性を保証する新しい包摂条項など、いずれも面白い切り口で映画を熱く語るものばかりです。ステイホーム期間中に普段見ないような映画に挑戦し、その映画の背景にある時代、社会、文化、そして、視聴者である私たちをも含む「人間」を学んでみませんか。

ご寄稿くださった皆様、ありがとうございました。

（地村みゆき）